

関係各位

京都府病虫害防除所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので、送付します。

◇

病虫害発生予察特殊報第 2 号

病虫害名 トウガラシ・ピーマンえそ輪点病
病原ウイルス キク茎えそウイルス
(Chrysanthemum stem necrosis virus : CSNV)
発生作物 トウガラシ
発生地域 府南部地域

1 発生経過

平成 27 年 6 月、京都府南部地域の露地栽培トウガラシにおいて、葉にえそや退緑、えそ輪紋、茎にえそ症状を呈する株が認められた。

RT-PCR 法によるウイルス検定を行った結果、Chrysanthemum stem necrosis virus (CSNV) が検出され、CSNVによるトウガラシ・ピーマンえそ輪点病と確認された。

京都府内では、本ウイルスによるトマト茎えそ病（仮称）の発生を本年 5 月に初めて露地トマトで確認したところであり、トウガラシでの確認は今回が初めてである。

なお、ピーマン等トウガラシ属での発生は、平成 22 年 3 月に茨城県で初めて確認されて以来、5 県から報告されている。

2 病 徴

葉にえそ症状（写真 1）や退緑（写真 2）、えそ輪紋症状（写真 3）、茎にえそ症状（写真 4）、果実ではえそ症状や重症の場合は奇形を生じる。

3 感染植物

キク、トマト、ピーマン、アスター、トルコギキョウ等への感染が報告されている。

4 伝染方法

本病原ウイルスは、トマト黄化えそウイルス（TSWV）やアイリス黄斑ウイルス（IYSV）と同じトスポウイルス属に属し、ミカンキイロアザミウマによって媒介される。

ミカンキイロアザミウマの1齢幼虫が本病原ウイルス（CSNV）に感染した植物を吸汁することによりウイルスを獲得し、成虫となってから永続的にウイルスを伝搬する。

なお、ウイルスを獲得した成虫から卵を通じた次世代への伝搬（経卵伝染）はしない。

また、種子伝染や土壌伝染、管理作業時にハサミや手指等に付着した汁液を介しての伝染（汁液伝染）はしないと考えられている。

ミカンキイロアザミウマ

元来北米に広く分布し、花き類の重要害虫として知られていたが、日本には平成2年に関東で初めて確認された後、花き類、野菜類を中心に全国各地に分布が拡大している。京都府では平成7年に発生が確認されている。

体長は雌成虫が1.5～1.7mm、雄成虫が1.0～1.2mmで、体色は雌成虫が淡黄色～褐色、雄成虫が淡黄色の微小な昆虫で、特に花を好む性質が強い。

本種の寄主範囲は広く、50科200種以上が記録されており、ハウスミカンやモモ等の果樹にも被害を及ぼす。

また、本病原ウイルス（CSNV）だけでなく、トマト黄化えそウイルス（TSWV）、インパチェンスえそ斑点ウイルス（INSV）を媒介する。

5 防除対策

（1）発病株は二次伝染源となるので、抜き取って土中に埋めるなど速やかに処分する。

（2）媒介虫であるミカンキイロアザミウマの防除を徹底する。

施設栽培では、開口部に白色または銀色の防虫ネット（0.4mm目合い以下）を展張し、施設外からの侵入を防ぐ。

（3）薬剤防除に当たっては効果の確認に努め、感受性低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤を散布する。また、感受性の低下を避けるため、系統の異なる薬剤をローテーション散布する（表1、2）。

薬剤散布に当たっては、登録内容を十分に確認する。

（4）収穫後の残さや雑草はミカンキイロアザミウマの生息・増殖場所となるので、除草や残さ処理を徹底する。

（5）施設では、栽培終了後に施設を密閉して蒸し込み、残存する虫の死滅を図る。



写真1 葉のえそ症状



写真2 葉の退緑症状



写真3 葉のえそ輪紋症状



写真4 茎のえそ症状

表1 「とうがらし類」、「甘長とうがらし」のミカンキロアザミウマ及びアザミウマ類に登録のある薬剤

系統名	薬剤名	適用害虫名	希釈倍数・使用量	使用方法	使用時期	使用回数	散布液量
合成ピレスロイド系	アーデント水和剤	ミカンキロアザミウマ	1,000倍	散布	収穫前日まで	2回以内	150～300リットル/10a
	アザミバスター水和剤						
ネオニコチノイド系	アドマイヤー1粒剤	アザミウマ類	1～2g/株	植穴又は株元 土壌混和	定植時	1回	
	アドマイヤー顆粒水和剤	アザミウマ類	5,000～10,000倍	散布	収穫前日まで	2回以内	100～300リットル/10a
	スタークル粒剤	アザミウマ類	1～2g/株	植穴土壌 混和	定植時	1回	
	アルバリン粒剤						
	スタークル顆粒水溶剤	アザミウマ類	2,000倍	散布	収穫前日まで	2回以内	100～300リットル/10a
	アルバリン顆粒水溶剤						
スピノシン系	スピノエース顆粒水和剤※	アザミウマ類	20,000倍	散布	収穫前日まで	2回以内	100～300リットル/10a
呼吸酸素阻害系	コテツフロアブル※※	ミカンキロアザミウマ	2,000倍	散布	収穫前日まで	2回以内	100～300リットル/10a
合成ピレスロイド系 + 環状ケトエノール系	クリアオール水和剤	ミカンキロアザミウマ	2,000倍	散布	収穫前日まで	2回以内	100～300リットル/10a
環状ケトエノール系	モベントフロアブル	アザミウマ類	2,000倍	散布	収穫前日まで	3回以内 (灌注は 1回以内)	100～300リットル/10a
			500倍	灌注	育苗期後半		50ml/株

※ スピノエース顆粒水和剤:登録作物名は「甘長とうがらし」

※※ コテツフロアブル:登録作物名は「とうがらし類(シントウを除く)」

表2 「野菜類」のアザミウマ類に登録のある薬剤

系統名	薬剤名	希釈倍数・使用量	使用方法	使用時期	使用回数	備考	
天敵 昆虫	アリガタシマアザミウマ剤	アリガタ 500～2,000ml/10a (約500～2,000頭/10a)	放飼	発生初期	—	施設栽培	
	ククメリスカブリダニ剤	ククメリス	50～100頭/株	放飼	発生初期	—	施設栽培
		メリトップ	100頭/株				
	スワルスキーカブリダニ剤	スワルスキー	250～500ml/10a (約25,000～50,000頭/10a)	放飼	発生直前～ 発生初期	—	施設栽培
		スワルスキー プラス	100～200パック/10a (約25,000～50,000頭/10a)	茎や枝に吊り 下げて放飼			
	タイリクヒメハナカメムシ剤	オリスター-A、 タイリク、 トスパック	500～2,000ml/10a (約500～2,000頭/10a)	放飼	発生初期	—	施設栽培
リクトップ		1,000～3,000頭/10a					
天敵 微生物	ポーベリア バシアーナ水和剤	ポタニガード水和剤 1,000倍 100～300リットル/10a	散布	発生初期	—	施設栽培	
	ポーベリア バシアーナ乳剤	ポタニガードES 500～1,000倍 100～300リットル/10a					

※ 各薬剤の登録内容は平成27年6月26日現在のものである。

農薬の使用に当たっては、最新の使用方法や注意事項等を必ず確認すること。また、各薬剤の使用回数を守るとともに、有効成分の総使用回数についても注意すること。